

図1 不織布べたがけによる出芽促進効果
2015/4/22播種。凡例の「有」「無」は不織布べたがけの有無。図中の縦棒は標準誤差を示す。

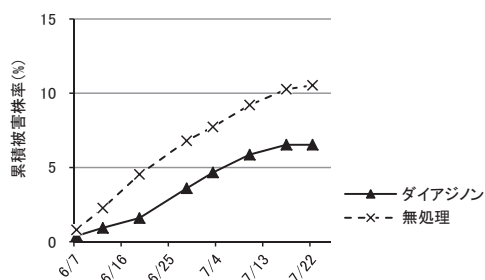


図3 ハエ類による累積被害株率の推移（2015年、芽室）
供試品種「ウルフ」。ダイアジノンは5%粒剤、5kg/10a処理。

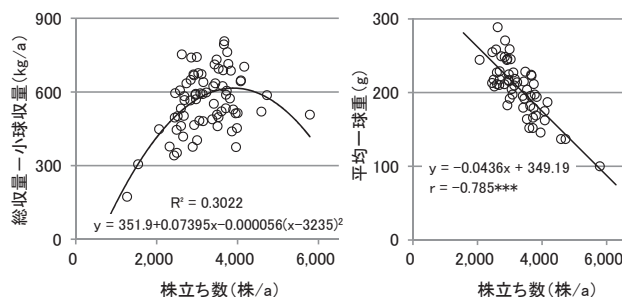


図2 株立ち数と収量および球肥大との関係
「総収量－小球収量」は加工・業務用途を想定し、総収量から原料に適さない小球分を除外した値。
左図：2012～15年に実施したすべての試験例をプロット。「ウルフ」（十勝農試、音更町A）、「オホーツク222」（十勝農試、北見農試、音更町B、斜里）、「北もみじ2000」（北見農試）および「パワーウルフ」（斜里町）を含む。
右図：上記のうち、球肥大が不良で極端な低収であった2013年北見農試および2015年十勝農試ならびに欠株が極端に多かった2015年音更町Bの「ウルフ」のデータを除外した。

表1 たまねぎ直播栽培体系（2016年改訂）

項目	内容
1. 品種	既存品種の中では「オホーツク222」および「北もみじ2000」が安定している。他に「ウルフ」「パワーウルフ」が使用可能である。同一品種では移植栽培に比べ生育が2～3週間遅れる。 *:倒伏前から根傷みを伴う著しい葉先枯れ症状が生じ、球肥大不足となる事例があった。
2. 播種期	播種は、4月中旬以降になり圃場が適正な土壤水分になった時点でできるだけ早く行い、遅くとも4月中には終わらせることが望ましい。収量性・品質を考慮して播種限界は5月10日とする。
3. 窒素施肥量	直播栽培における窒素施肥量は当面移植栽培に準じ、土壤診断に基づく施肥対応を行う。
4. 播種粒数（栽植密度）	播種粒数を移植栽培より多い3,800～4,200粒/aとする。そのためには播種作業幅1.2mに対し5条植えとし、畝幅24cm（播種作業幅1.2m）×株間10～11cmとする。なお、4条植え（畝幅30cm）で実施する場合にあっては、播種粒数3,800粒/aには満たないが、球肥大確保のため株間9.5cmとする。
5. 播種法	播種機によるコート種子の1粒まきとする。安定な出芽には、良好な砕土、適正な播種深度（平滑鎮圧輪使用時2cm、鼓型鎮圧輪使用時3cm）および鎮圧が重要となる。
6. ベたがけ被覆	不織布によるべたがけ被覆は、降雨時のソイルクラスト軽減、土壤水分保持、地温上昇などによる、出芽および初期生育の促進や生育の前進が期待できるため、気象や圃場の条件により実施を検討する。ただし、必ずしも増収効果に結びつくものではない。また、著しい高温・干ばつ条件下では高温障害による枯死株が発生することがあるが、減収のリスクは小さい。
7. 根切り時期	品種の早晩に応じて移植栽培における基準を遵守することで、必ずしも直播栽培で変形球が多くなることはない。
8. 圃場の選定	直播栽培に取り組む際には、排水対策等の栽培圃場の整備が前提になる。砂質土壌および粘質土壌にてソイルクラストの発生が懸念される場合は、鼓型鎮圧輪を使用する。
9. ハエ対策	対策として、当面、ダイアジノン5.0%粒剤の播種前全面土壌混和処理を行う。

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。

道総研十勝農業試験場 地域技術グループ

電話（0155）62－2431 E-mail：tokachi-agri@hro.or.jp